肥後歴史散歩

武士になった神人たち
―阿蘇一族―

今でも、太古からの息吹を伝え噴煙を上げ続ける阿蘇山。人は昔からこの山を神と崇め、敬ってきました。その神官として阿蘇、矢部を治めていたのが阿蘇一族です。

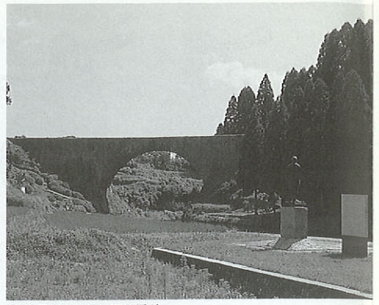
今回は、古代から明確な歴史を持つこの一族の、中世における武士としての活躍を訪ねました。

古代からの系譜

遠い神代の頃、荒涼として凶賊の横行する阿蘇を平定し、沃野を切り拓いたと伝えられる健磐龍命。阿蘇氏一族はその子孫といわれ、命の他十二の国造神を祀った阿蘇神社の大宮司として、古代より阿蘇地方一帯を統治していた。

律令制崩壊後の中世、社領と地位の自衛のために一族は武力に頼り、神職でありながら武門として活躍するようになる。元弘の変（一三三一年）では宮方に就き、菊池武時と共に兵を挙げ、建武中興（一三三四年）で足利尊氏に呼応し六波羅探題府を攻略。南北朝期に入っては数多の兵を率い、九州官軍の中堅として勇ましき武者振りを発揮した。

しかし戦国末、島津氏（薩摩守護）の侵攻により衰退。江戸時代には代々社家として存続しただけであった。


Ⓓ岩尾城の横には通潤橋が…。

Ⓓ惟時が最初に反南朝の兵を挙げた岩尾城跡

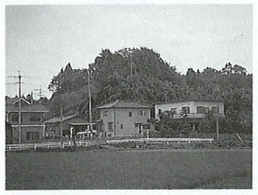
惟澄の武勇

さて、一族の中でも南北朝初期、義を尽くし活躍したのが阿蘇（惠良）惟澄である。

元弘の変で初出陣。建武二年（一三三五）足利尊氏が朝廷に反旗を翻すや少弐貞経（足利方）を落さんと太宰府に攻め寄せた。以来、正平六年（一三五一）までの間戦場に赴く事幾多に及び、益城、阿蘇、八代、詫磨と一族・他門を率いて転戦。数々の戦功を上げた。延元二年（一三三七）豊田庄山崎原における少弐派（家臣饗庭少次郎）との合戦では、乗馬を斬られながら徒武者となって敵を蹴散らしたという。

勇猛果敢、一時九州を制圧した南朝の強者として名を馳せた人物であった。

Ⓒ延元2年(1337)北朝方一色範氏を打ち破った戦場―犬塚原辺り


Ⓑ隈庄城跡

Ⓐ惟時が挙兵した山崎城跡付近

Ⓗ菊池氏の挙兵に呼応して惟澄が旗を挙げた甲佐岳

Ⓖ阿蘇四社の一つ甲佐神社

Ⓕ惟澄の拠城・甲佐城跡付近

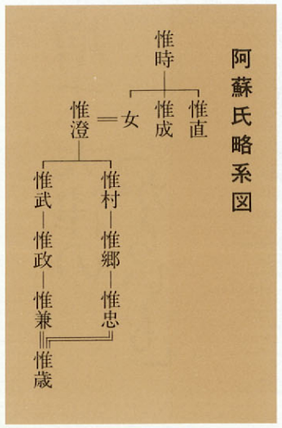
Ⓔ阿蘇神社の分社・男成神社。阿蘇惟義がここで加冠元服の式を行って以来、代々阿蘇氏が元服の式を行ったので「男成」の名がついたという。

Ⓔ国道218号線に面した男成神社の鳥居

惟時の二心と惟澄

延元二年（一三三六）、多々良浜の戦いで時の大宮司惟直が自刃。父惟時が大宮司職に復帰した。惟時は女婿惟澄ら一族を率い宮方に仕えたが、朝廷からの恩賞が思いのほか得られぬことに不満を抱き、興国四年（一三四三）遂に足利方に就いて矢部岩尾城に兵を挙げた。

南朝に尽くす惟澄は一族といえども猶予せず、直ちに馳せ向かいこれを追い落とした。しかし翌年、北朝から兵糧料、寺社造営料等を与えられた惟時は再び挙兵。惟澄は菊池武光と共に義父惟時を散々に打ち破った。惟澄自身も南朝の処遇に不満を持っていたのだが、己のみの利を求め分裂していく武士団が増えていく世の中で、忠義を守り、一族の離反を防いだのであった。以後、惟時は南北朝のどちらにも態度を明らかにしない。それから五、六年の間、惟時をなだめすかした惟澄は、正平五年（一三五〇）遂に惟時を純然な南朝方へと帰順せしめ、終生、九州南朝軍中堅武士団としての立場を守り抜いたのだった。

〈参考文献〉・「勤皇阿蘇家の活躍と矢部史話」卯野木卯一良著

阿蘇氏略系図